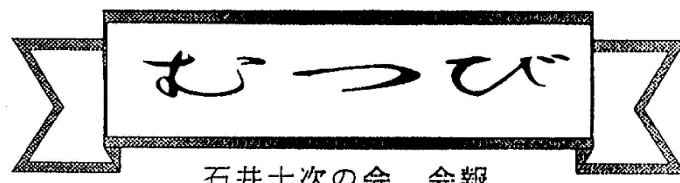


2026 年
(令和 8 年)
6 月 11 日



345 号

石井十次の会 会報

所感並びに令和 7 年度石井十次の会報告

石井十次の会

会長 橋田 和実

会員並びに関係各位の皆様にはご清祥のことと拝察申し上げます。わが国の気候変動が年々激しくなっており、猛暑、寒冷、大雨、少雨が 1 年間で目まぐるしく変化しています。

一方、世界情勢は独裁的リーダーであるロシアのプーチン大統領やアメリカのトランプ大統領が戦争や紛争を引き起こし、世界中が翻弄されています。そのことによる経済的、軍事的影響は計り知れないものがあります。わが国においては初の女性首相による高市内閣が誕生し、今の国難をいかに乗り越えるか、国民の期待を背に奮闘中であり、地方では災害の発生とともに人口減少や少子高齢化が著しく進行し、持続可能な地域社会をどう築いていくかが課題となっています。

そのような中、日本の教育力の低下が深刻となっており、家庭教育力や学校教育力の低下、さらに地域教育力の崩壊が起きています。最も大切なのは人間教育や人材育成です。なぜなら、家庭、地域社会、組織や企業を担うのは“人”であるからです。さらに、働き方改革やスマートフォン、AI によって日本人の勤勉性が少しずつ失われ、怠惰になっていないか危惧されます。

石井十次が 3,000 人の孤児救済を行った明治時代は人口約 5,000 万人で、国内外も世情不安定な中でしたが、政府の援助もなく、民間の支援を受けながら偉大な児童福祉事業を成し遂げました。

現在、この精神文化を引き継いで、石井記念友愛社が戦後まもなくから約 80

年間、自然豊かな宮崎県の各地で児童福祉事業を進展させてきました。子どもたちの基本的な生活習慣、忍耐力、勤勉性、協調性、礼儀正しさを培い、運命を良い方向に変えながら、立派に世に送り出してきました。最近は大学、短大、専門学校に進学する子どもたちも増加し、進学率も約60%に達するほどです。

石井十次の会も約30年前から石井記念友愛社の事業活動を側面から支援してまいりました。令和7年度、比較的順調に活動や事業を行うことができました。県内支部の結成は都城、宮崎、西諸、西都、高鍋木城の五つに拡大しました。今後、各支部の活動が活発となり、本部を中心に支部間の交流も盛んになると考えられます。

昨年度の会員研修は、久しぶりに石井十次孤児救済のルーツを訪ねて岡山に2泊3日の研修旅行となりました。当初の石井十次の活動とその影響を受けた人々の様子や歴史を学ぶ良い機会でありました。

機関誌「むつび」の編集委員会も毎月行われ、今年度は当編集委員の石川正樹氏による「石井十次を支えた先人たち」の続編を発刊することができました。また、通信発送作業も会員ボランティアによって毎回行われています。

給付型奨学金事業においては、5名の卒園生に支援しました。奨学金を受給されて、大学、短大、専門学校に進学された皆さんは、高卒の皆さんと同様に、立派に社会人となって活躍されています。

その他に石井十次^{えいいき}塋域清掃、代表役員会、幹事会、総会を行っています。また、友愛社事業の中で、鯉のぼり掲揚、石井十次セミナー、収穫感謝祭、クリスマス会、卒園お別れ会にも参加しました。

尚、令和7年度収支決算、奨学金基金、積立金の状況については別紙にて報告させていただきます。

最後に石井十次の会へのご支援ご協力に感謝申し上げるとともに、皆様がこれからも健康で、元気に過ごされることをお祈り申し上げます。

柿原政一郎と正幸会

1. 柿原政一郎が財団法人正幸会を設立

柿原政一郎が父・正一まさかずの遺産を基金として財団法人正幸会せいこうかいを設立したのは、昭和 22 年 10 月のことでした。設立の目的は、正一が生前に高鍋藩の藩校・明倫堂の学風を尊重し、その遺風を残そうとした志を実現するためでした。正幸会の名称は、若くして田原坂に戦死した正一の父・正幸まさゆきからとりました。政一郎は父・正一を心から尊敬し、いつも父の背中を見て育ちました。正一は裸一貫で新田村湯風呂ゆぶろの原野を開拓し、立派な農地をつくりあげました。政一郎は設立趣意書に次のように書いています。

「故柿原正一は、高鍋藩士柿原正幸の長男として維新の風雲急なる裡うちに生れ、14 歳にして父を西南の変に失ひ、夙くより審さに辛酸を嘗む。置県の初、宮崎県雇となりてより、前半生を俸給に衣食しつつ、志を殖産興業に立て、児湯郡新田村湯風呂谷の官有地払下を出願し、明治 25 年之が許可を得るや、僅少の家産と勤儉蓄財を資本として茲ここに移住し、畜産に開墾に植林に、全らゆる難苦と戦ひ、独力経営 45 年、無人の曠野に、戸数 15、耕地 40 町、山林数十町を算する一農村の創作に成功し、74 歳を以て、昭和 12 年 10 月 11 日、天寿を茲おに終ゆ。(中略)殊に清観院公せいがんいんこう(七代藩主秋月種茂あきつきたね)以降高鍋藩学の遺風を景仰し、必ず微力を振学興風に致さむことを本願としたりき。(後略)」

正幸会の理事長に政一郎、常務理事に嗣子・幸二、理事に孫・中村哲子と石井記念友愛社・児島虬一郎が就任。実は 2 年前の昭和 20 年、二度目の召集を受けた児嶋虬一郎は、高鍋で本土防衛の任務に就いていたところ終戦となり、奇しくも祖父・石井十次の生誕の地で生き残りました。政一郎に背中を押された児嶋は、その年に茶臼原に石井記念友愛社を設立したのです。彼は正幸会の 3 代目理事長を継ぐことになります。

2. 政一郎、高鍋町長として図書館を建設、正幸会が支援

昭和 25 年、高鍋町長となった政一郎は、逼迫した町財政の建て直しに敏腕を揮うかたわら、町の文化向上のために図書館の建設を決意しました。財政は困窮しているため高額の予算はとてもとれず、元営林署の土地建物を町に譲り受け不足の土地は政一郎が自腹を切って購入し町に寄付。建物を図書館に改造。高鍋農学校に保存されていた土蔵の明倫堂書庫を解体修理して図書館に移設し、古文書を収納。これらの費用は正幸会が負担しました。高鍋図書館は藩校明倫堂の古文書など 16,000 冊を所蔵する県内有数の図書館となります。昭和 30 年 3 月に図書館の開館式を行いました。政一郎は町長の報酬を辞退し、無報酬で町長を勤めましたが、この年だけは報酬を請求し、議会の承認を得て年俸 38 万 4 千円を図書購入費に寄付しました。高鍋町は令和 4 年、町立高鍋図書館を柿原政一郎記念高鍋図書館と改称し、柿原政一郎を顕彰しました。

正幸会(正式には一般財団法人正幸会)は、その後も高鍋図書館をはじめ、近隣の中・小学校に図書購入費の寄付を続けています。また正幸会の経営母体である高島産業株式会社(社主・柿原家)は、石井十次の会発足以来の団体会員でもあります。

(編集委員 石川正樹)

むつび編集委員と「石井十次を支えた先人たち」＜続編＞販売の紹介

1 本年度のむつび編集委員を紹介します。

4月22日編集会議

1	竹之下悟	西都市	委員長
2	徳地順子	高鍋町	
3	石川正樹	高鍋町	
4	黒木三鶴	西都市	
5	福島博子	宮崎市	新4月～
6	松下さおり	宮崎市	休部中

福島博子氏は西村さと子氏(高原町)と交代です。

西村さと子様 永年にわたり遠路からのご尽力やご活躍に、深く感謝します。

福島博子様よろしく申し上げます。

2 「石井十次を支えた先人たち」＜続編＞絶賛販売中です

石井十次の会のご支援で発刊することができました。

著者はむつび編集委員も務められる石川正樹氏です。

監修はむつび編集委員会。



宮崎日日新聞にも掲載いただきました。

十次の功績を学ぶうえでも必読書としたい。

500円で販売中です。

編集委員 竹之下悟

《おしらせ》

★新会員のご紹介（敬称略）

【県外】アーネストサービス(株) 【都農町】黒木勝利

★ご寄付をいただきました（敬称略）

【県外】宮崎道也 國延佳世 奥村須磨子 佐藤晃一 森重やす子 山崎数彦 田中浩洋 植木 洋子 山岡雪子 倉原れつ子 篠原勝 浦初恵 小林敦子 馬場巖 杉尾和子 三木俊子 金平万吉 加行尚 竹内留美子 【宮崎市】永吉洋次・智子 黒木国昭 西野宏・悦子 宮崎聖三一教会 芥川恵子 桐ヶ谷裕美 古賀義明・トシ子 黒岩高広 谷口眞由美 村田れい子 松尾フジ子 荒武真奈美 播磨美保子 黒水斐子 大松繁光 丸山雅照 山崎正彦 山崎美智恵 森岡道子 岩見智子 越山理枝 野坂敬 原野茂盛 【都城市】松元正次 松元優哲 豊丸昭子 乙丸治子 【延岡市】土井裕子 【西都市】大平信道 (株)立生園 中川留美 日高博子 黒木郁雄 石川健 兼松圭次 黒木良直 【新富町】山西三重子 【高鍋町】真志喜愛子 押川美津子 木下浩利・ほなみ 池田サワ子 永友喜美子 鶴敬雄 萱嶋稔 高橋裕子 蟻塚クリニック 【日向市】小川修 富山栄子 【川南町】吉村幸代 【木城町】長友英親 小野浩司 石井雄二 【高原町】福丸タミ子 森山雅之 伊達寛之 西村四男・さと子

☆7月通信発送作業は7月8日(水) 9日(木) 両日ともに9:00からです。

*ここまでの掲載者は編集等の都合により5月24日までのものとしています。

この会報は、宮崎県を中心に全国 1700 余の個人・団体に毎月送付しています。
 ☎ 884-0102 宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1
 社会福祉法人 石井記念友愛社後援会
 石井十次の会
 TEL/FAX 0983-32-4612

メール yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

編集後記

巻頭は橋田和実会長にお願いしました。
 大所高所からの知見に基づく所感と十次の会活動のすべてを把握したうえでの激励は身に沁みます。

編集委員 竹之下悟